

美氏の方が印象に残る。

防空壕に避難訓練

昭和十九年後半、B29が頭上を飛来する戦争末期の当時はとても安閑として勉学に打ち込めるような時代ではなかつた。「大型爆撃機B29はともかく、艦載機F6Fが草むらにはいつくばつている我々学童たちの頭上すれすれに飛んできて、その銃口にさらされたときは『やられる』と思い、生きた気がしなかつた」こう語るのは、竹原の小山清市氏だ。

また、松根油を注入するために、学校のすぐ東（現在の産業研修センター）にその作業場があつた。そこでは斧で割れない松の根をダイナマイトで爆破していたという。

西勝の前田新氏は、当時における米軍機の空襲に備えて学童の避難訓練をこう回顧している。藤川国民学校の北西にある森まで約三百m程の距離を小学三年生以下の児童が避難する訓練を、昭和十九年の春から二十年七月頃まで数回にわたつて行われていた。四年生以上の児童は焼夷弾の爆撃に備えて、校庭に掘られた防空壕に避難し、学校に焼夷弾が投下され火災が発生した場合に備えて、その消火訓練を行い、校庭の一角では、米軍に対して戦うために婦人会が連日のように竹槍訓練を号令に従つて行われてもいた。

小学校では、昭和十七年から戦死者の合同慰靈祭が行われ、昭和十九年秋には、二十数名の戦死者の村葬が講堂で行われて、彼らも遺児としてそこに参列したという。

授業よりも勤労奉仕

戦時中は健康な教員はすべて戦争に駆り出され、女性の教員や若い代

用教員が教えていた。戦争末期になると、ほとんど授業にならず、自習と勤労奉仕の毎日となつた。

昭和二十年七月の終戦直後には各学校で国民学校学徒隊を組織し、臨戦態勢に入つた。しかし、一ヶ月で敗戦となり、藤川国民学校でも混乱状態に陥つた。若い平山校長はまず児童の心を落ち着けることに意を用いていた。

勤労奉仕の数々

戦争が激しくなるにつれて食糧事情が農村地域にも押し寄せてきた。

小学校でも高学年は食糧増産に励むことになつた。道路の両脇には大豆や胡麻を植えた。特に富岡から竹原、下中川への南北の道で瘦せた大豆や胡麻を収穫し、お国のために幼い児童たちは懸命に汗を流していた。松根油は飛行機の燃料になると言われて、藤田の山に松の根を堀りに行つたりした。

混乱の中の学校生活

食糧難はますますひどくなり、いよいよ学校の校庭も半分はいも畑に変身していつた。もちろん耕すのは先生と児童が中心だった。

終戦直後は、どの小学校でも正常の授業は行われていなかつた。我が校でも特に六年生は中等学校の入試を控えていたが、修業式までほとんど自習だつた。不安を抱えた児童たちはグループで学習し合つていた。

黒塗り教科書

昭和二十年九月以降はいわゆる「黒塗り教科書」による学習が行われた。黒塗り教科書とは戦争中の軍国主義教育に関係する部分を墨で塗つ